

チャレンジ菜園教育



子供たちをロボットにしないために！正しいモノの捉え方とは？

今の子どもたちは、知識を活かす術(すべ)を知りません。

そして、論理を飛躍し、何でも鵜呑みにしてしまいます。

それは、体験から学ぶという機会が少ないからです。

都会には、野山や海や川といったリアルな体験ができる場所也没有ありません。

逆に、ゲームやスマホ、インターネットなど仮想の世界が広がっています。

そんな中、菜園は、体験学習の場として脚光を浴びるようになってきました。

では、そもそも体験学習って何のためにやるのでしょうか。

わざわざ、子供たちに畑仕事をさせる意味があるのでしょうか？

今の子供たちの頭の中には、知識がいっぱい詰まっています。

でも、それは、こまぎれの知識です。

そのため、社会に出てから役に立ちません。

つまり、頭でっかちのロボットに育ってしまうのです。

それでは、自分で、目標を立てて挑戦するようなことはできません。

また、何か課題に出くわしても解決に導けません。

それでは、どういった能力(脳力)を身に付ければ良いのかです。

ひと言で言うと、それは、自らで正しい判断ができる力といえます。

では、何をもって「正しい」とするかです。

人は、「自分が正しいと思うこと」が「正しい」と信じ込んでいます。

そして、その判断のもとに行動します。

でも、なかなか自分の思い通りにはいきません。

人生は、想定外の連続といってもいいくらいです。

そして、人類史も過ちの繰り返しです。

それは、正しいと思っていることと、事実とが合致していないからです。

では、事実に沿って正しく判断するには、どうすればいいのか？です。

それでは、実際に、菜園に入って考えてみることにしましょう。
菜園というのは、リアル(弁証法的)な世界です。
教科書(形式論理)通りにはいきません。
したがって、正しいモノの捉え方を学ぶのに最適なのです。

オクラの葉っぱに毛虫を見つけました。
こういう場合...
たいへんだ！ 被害が広がる前に全滅させなければ...と考えます。
そして、殺虫剤を散布しよう、となります。



このように、何か問題が起こると対策を考えます。
どう対処することがベストなのか、と考えるわけです。
でも、実は、こうした判断は、思索の上に導き出されるわけではありません。
(自分では、思索に思索を重ね、答えを導き出しているつもりですが...)
実は、その答えは、意識にのぼる前に、すでに決まっているのです。
したがって、いくら思索を重ねても、他の答えは出てきません。

毛虫を見つけたら...
反射的に、それを抹殺しなければ、という考えが浮かんできます。
なぜならば、私たちの脳に、そういう回路が刻み込まれているからです。
毛虫→悪い虫→見つけたら殺す、というような...
こうした言葉を、私たちは、子供の頃から数知れず耳にしてきました。
そのため、私たちの脳に、強く刻み込まれているのです。

いわゆるマインドコントロールです。

したがって、誰が何と言ったって、毛虫は身の毛もよだつくらい嫌いです。殺すしかないのです。

私たちは、日々、自らの頭で考えて行動しているように思っています。でも、それは、脳に刻み込まれている観念に操られているだけなのです。

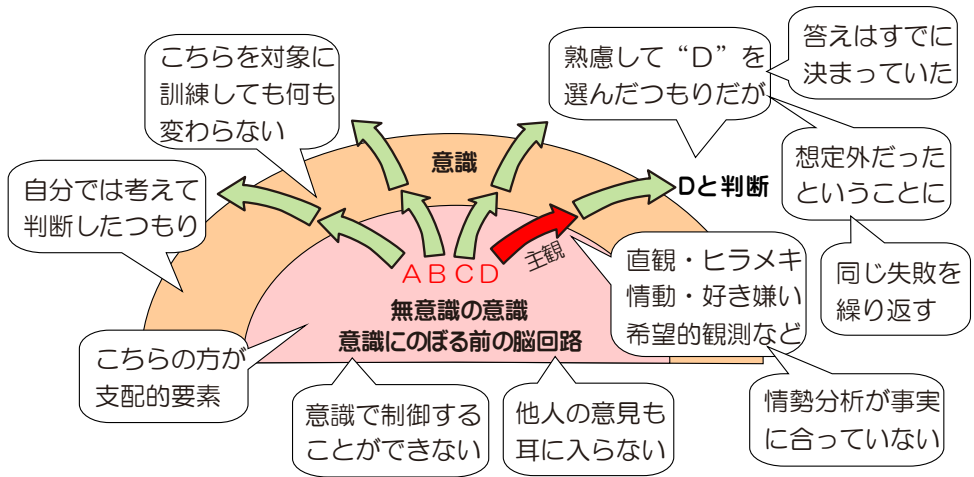
言うなれば、思い込みです。

思い込みというのは、このような「好き嫌い」だけでなく...

憶測、印象、評価、仮定、希望的観測など、があります。

事実ではなく、感覚的・気分的なものです。

これらが、判断を誤らせる元凶になります。



子供の場合は、幸いなことに、この脳回路は、まだ出来上がっていません。

そして、好奇心旺盛で、あらゆるものを吸収していきます。

この無垢な時期に、いかに正しい脳回路を構築しておけるかです。

でも、これは、諸刃の剣です。

周りの大人の否定的・敵対的な考えも、すぐに子供の脳に反映してしまいます。

体験学習とはいっても、ただ単に体験させれば良いというものではありません。

大人の導きこそが大切なのです。

菜園は、そのための大人の学びの場ということもできます。

両面を把握する

では、実際に、毛虫による食害について考えてみましょう。

事実には、必ず、両面(下記の2つ)があります。

その両面とも把握しなければ、事実の把握とはいえません。

(A)毛虫に葉っぱを食べられた

(B)それ以外の葉っぱは食べられていない

こういった場合、普通、(A)だけしか見えなくなります。

つまり、人は、際だった現象面にとらわれてしまうのです。

(現象面とは、欠点や症状・結果など、目立つ側面です)

ほとんどの人は、この状況を把握する段階で、つまづいてしまいます。

でも、本質というのは、(B)のほうに隠されています。

(B)のほうの食べられない葉というのは、健全な葉です。

健全な葉は、細胞の配列も緻密で揃っています。

また、それを保護するロウ質の皮膜もしっかりしています。

したがって、毛虫は、健全な葉を食べることはありません。

全体を把握する

今まで見てきたのは、「オクラ」と「毛虫」の2者の関係だけです。

そして、時間軸(歴史的認識)がありません。

つまり、時空のほんの一断面しか捉えられていないことになります。

それでは、事実とは言えません。

事実は、全体的・総合的・時相的(歴史的)な上に成り立っています。

葉っぱというのは、どれも同じように見えます。

でも、葉っぱにも若い葉、働きざかりの葉、老いた葉があります。

若い葉は、光合成で作った炭水化物は自分の生長のために使います、

働きざかりの葉は、作った炭水化物を、若い葉や根にも送ってあげます。

老いた葉は、光合成する力も衰えています。

その老いた葉が日光を遮ってしまうと、下の葉が光合成できません。

それでは、炭水化物が作れず、若い葉を育てていけません。

また、下草にも日光が届きません。

老いた葉は、速やかに処分したいわけです。

でも、そのまま地面に落としたのでは、硬い繊維はなかなか分解されません。そこで、毛虫の出番です。

毛虫のお腹の中には、硬い葉の繊維を分解してくれる腸内細菌がいます。

それで、硬い葉も柔らかいフンにしてくれます。

そのフンを、今度は、地面や地中にいる生き物たちが分解してくれるのです。それが、次世代の養分になります。

科学教育の欠陥

今の科学(教育)では、物事の全体を捉えるという考え方がありません。

そのため、全体から本質(支配的要素)をつかむという能力が養われません。

つまり、前例の(A)のみを対象にした科学です。(形式論理的科学)

したがって、生み出される方法論は、対症療法に直結してしまいます。

対症療法では、文字通り、症状(欠点・患部・現象面)を対象にします。

悪いところを探し出して、それを排除することで問題解決を図ります。

これは、原因ではなく結果に対する対応です。

したがって、解決できたかに見えても、新たな課題(副作用)が生じてきます。

その課題を抑えると、さらなる副作用(課題)が生じてきます。

そして、悪循環に陥って、手に負えなくなってしまうのです。

世の中のあらゆる問題は、どれも単独で存在しているわけではありません。

色んな要素が、複雑に絡み合っています。

その各要素間にも、主要なものと同次的なものなど、様々な関係があります。

まずは、こうした全体の関連性を明らかにしなければなりません。

そして、その中から問題解決のカギを探し出していくこととなります。

でも、そのカギは、隠されていて、容易には見つかりません。

したがって、そのための能力の育成が必要になってきます。

それは、知識をいくら詰め込んでも身に付けることはできません。

そのためには、リアル(弁証法的)な世界での実体験(行動)が必要なのです。

自然界の秩序

今まで見てきたのは、自然な食害です。

写真のオクラは無施肥で、自然に近い状態で栽培されたものです。

したがって、毛虫がいるのが当たり前で、何の問題もありません。

では、不自然な食害とは...

それは、環境を乱したことによって起こる食害です。

その代表が、過剰施肥によるものです。

土壌には、精妙なバランスのもとに、多くの生き物たちが生活しています。

そこに、大量の肥料が撒かれると、土壌の生き物たちは大混乱です。

すみやかに、元の状態に戻さなければなりません。

そこで、野菜は、吸収した肥料分を葉っぱに貯えます。

つまり、軟弱徒長します。

そして、その葉っぱを毛虫に食べてもらいます。

肥料分を外部に運び出してもらうわけです。

肥料分を食べた毛虫たちは、成虫(蛾)になって飛んでいきます。

そして、どこかで亡骸となり、その地を肥やすことになります。

このように、自然は、常に全体の均衡が保たれるようになっています。

でも、さらにひどい状況だと、野菜は生きていきません。

そういう場合は、若い葉も食べられてしまいます。

そして、カビ菌も感染し、土に還されることになります。

その土地に適さない野菜も同様の運命をたどることになります。

その代わりに、新たな命が芽生えてくるわけです。

つまり、虫たちは、運搬や解体の役目を担っているといえます。

自然界は、こうした厳密な秩序のもとに運動変化しています。

害虫といえども、その存在は、秩序そのものです。

そして、あらゆる因子間に、厳密な相互作用がはたっています。

お互いメッセージをやり取りしコミュニケーションを図っています。

そのため、自然界が、自他一体として進化していくことができるのです。

善悪の決め付け

でも、人が、こうしたことを目にする... (形式論理で見ると)
どうしても、害虫が野菜を枯らしてしまうように見えます。
そして、悪のレッテルを貼って抹消するという方向に走ってしまいます。

その根っこにあるのが、近代西欧哲学をベースにした今の科学教育です。
つまり、「対立(差異)の抹消によって進歩発展が図れる」とする考え方です。
あらゆる問題は、この理念のもとに対処されていくことになります。
そのため、事物には善か悪か(益か害か)のレッテルが貼られます。
そして、悪を抹消することで問題解決が図られていきます。
また、優点を伸ばすことより、欠点を修正するほうが重視されます。
結局、対症療法に突き進んでいくことになります。

たとえば、善玉・悪玉というと... 腸内細菌です。
悪玉菌には、クロストリジウムやユーバクテリウムというのがいます。
(空気中の窒素からアミノ酸を生成することのできる窒素固定菌の一種です)
これら細菌は、蛋白質不足に陥った際に、腸内でアミノ酸を生成してくれます。
(野菜も、これら細菌のおかげで、無施肥でも健全に育つのです)
でも、こうした細菌たちは、今の飽食の時代には、出番がありません。
そのため、悪者扱いされているわけです。

そして、悪玉として忌み嫌われているのがコレステロールです。
でも、コレステロールというのは、私たちの体にとって必要不可欠な物質です。
私たちの筋肉や血管・内臓など、あらゆる器官の細胞膜の材料になります。
また、身体の調節機能をつかさどる性ホルモンなどの材料にもなります。
したがって、コレステロールが不足すると、細胞そのものがひ弱になります。
そのため、血管がもろくなって、脳出血を起こしやすくなります。
また、免疫力が低下して、感染症やガンにもなりやすくなります。
そして、神経機能が衰えて、うつ病や痴呆症の危険性も増します。

この弁証法的な世界で、絶対に犯してはならないのは...
事物の一面だけを見て、全てと決め付けることです。

教育の本質とは

私たちは、つい、悪い面に敏感に反応してしまいます。
そして、それを抹消していくことこそが、進歩だと思いがちです。
それによって、善だけの理想的な社会の実現につながると...

でも、実際は、そうはなっていません。
この世の中は、多様性の世界として創造されています。
そこにあるもの全てが個性ある存在です。
そして、固定されたものは何一つありません。
その全てが何かになり得る可能性を秘めています。
そのため、あらゆる局面において対立(差異・摩擦)が生じます。

では、なぜ、そんな仕組みになっているのかという...
対立(差異・摩擦)の止揚によって創造(誕生・進化・発展)が起こるようになります。
ただし、そのためには、お互いの良い面を活かし合う必要があります。
悪い面の衝突では、創造の道を断つことになり、破滅へと向かってしまいます。

この世の中には、客観的な状態としての闘争というのは存在しません。
闘争という手段を講じた際に、はじめて闘争状態に陥るというだけです。
それは、私たちの頭の中にある概念の現象化に過ぎないわけです。
どういう手段を選択するかは、私たちに、ゆだねられていることとなります。

対立(差異)を活かして止揚を図る道は必ずあります。
あらゆる存在の裡には、発展(成長)に向かうための原動力が内在しています。
その原動力を、「いのち」と表現することができます。
その「いのち」を、いかにして見抜くことができるかです。
それを、全力を上げて探ることこそが科学的態度です。
そして、その能力を育成することが教育の本質といえます。



<https://www.seedlabo.jp/>
シードラボ (学びの菜園)

